

中村和弘

原発の無臭無音や敷松葉  
糸のごとく水洩れている魂まつり  
ぼうたんの忿怒の相を描きだす  
馬の尻の綺麗に割れて莖咲く  
電球の白熱しおり花の中  
安定せざる栄螺の殻を座右にす

原爆地影絵のごとく梅を干す  
自転車の利発なる音冬がくる  
静電気把手に爆ぜて婚約す  
大寒の古傷眉の中とおる  
神経質な天秤といる花の中  
緋鯉に餌祭のごとく盛りあがる  
日溜りは巨きなレンズ笹鳴す  
空砲のごとき声だし朱欒売る  
生コンの拗ねて出てくる花の中  
末枯れの癩脈となり畝のこる  
中空に空室多し桜咲く

風　の　骨　さ　さ　り　し　春　の　渚　か　な  
折　目　よ　り　砂　粒　こ　ぼ　れ　夏　逝　け　り  
喉　仏　の　あ　た　り　が　痒　し　麦　の　秋  
靈　柩　車　の　中　よ　く　滑　り　冬　に　入　る  
貝　割　の　き　れ　い　に　曇　る　袋　選　る  
バ　ツ　ク　ミ　ラ　ー　の　ま　つ　黒　に　見　え　油　照　り  
生　ゴ　ミ　の　煩　惱　詰　め　て　梅　雨　に　入　る  
風　鈴　の　き　り　き　り　舞　い　の　闇　が　あ　り  
雷　の　下　靈　柩　車　の　金　鮮　し　く  
大　安　の　こ　の　赤　剥　け　の　牡　丹　の　芽  
大　寒　の　ひ　ろ　が　り　い　た　る　白うすの　創

枯 蔦 の 爪 た て て い る 獄 の 壁  
休 む 船 腹 水 陽 炎 の 巢 と な り ぬ  
鎧 戸 は 飢 饉 の 音 す 雛 ま つ り  
黄 落 へ 針 の 震 え る 体 重 計  
銃 創 の 皺 の 抽 象 黄 落 す  
縞 馬 の 縞 に ま ぎ れ て 睡 魔 く る  
祈 禱 師 の 黒 き マ ニ キ ュ ア 夏 逝 け り  
干 梅 の 怨 の 字 に 似 る 一 つ 見 ゆ  
金 屏 を 嘴 の ご と き が 映 り 飛 ぶ  
脂 ぎ る 羽 毛 を の せ て 水 澄 め り  
神 棚 の 暗 い と こ ろ の 残 暑 か な

青谷のどこかが笑う刃を研げば  
靈面が街に棲みつき黄落す  
痙攣しエンジンとまる紅葉谷  
捨てし河豚小石を嚙んでいたるなり  
熱湯の環流見ゆる冬ごもり  
花冷の飯粒燥き足裏刺す  
奔放な枝を虜に水澄めり  
灰燼の芯より翔ちてゆりかもめ  
菜の花に墜ちて鷗のさわぐなり  
風にのり羽毛のあそぶ冬の庭  
栗実る鴉の骸吊られいて

## 《受賞のことば》

### 映像から俳句へ

中村和弘

現代俳句協会の総会（授賞式）の当日は、前日の夜から降り続いていた雪で、東京は今年をはじめの積雪であった。会場の入口で何気なく立ちどまり、うしろをふりかえると、降りしきる雪の中に十九歳の自分が佇立しているのが、ラッシュフィルムの一コマのように一瞬見えた、と思った。

文学少年というよりは、映画少年であった私は、浜松の繁華街の裏通りにあった陰気で小さな映画館にややうしろめたいような気分を足ふみいれた。上映されていたのは、ミケランジェロアントニオーニ監督の「情事」という作品で、その無機質ともいえる乾いた映像とドキュメンタリー的な手法にひきこまれ、時間の経つのを忘れた。後年であるが、それがヌーベルヴァーグの代表的な作品の一つであることを知った。そんなこともきつかけで、なんとか東京に出て映画の脚本の勉強

をしたいという思いがつのり、反対を押しきって田舎を出奔した。その日は菜の花が満開であったが、七時間余りをかけて東京駅に着くと激しく降りしきる雪で呆然とホームに立ちすくんだ。

会場の入口で、いくぶんの感傷をとめないながらあたかもデジャヴイユーのごとく、見えた、と感じたのはその時の雪のホームに立った自分のみじめではあるが希望にふくらんだ影である。

俳句に身を入れることになったのは、年齢的にもかなりあとで、ある不思議な縁で田川飛旅子に紹介されてからである。田川飛旅子作品の、時にはそっけないほどメカニックで乾いた感覚が、自分の求めていた映像感覚ともかさなり今日に到るまで師事している。はじめに映像の勉強をしたことで、稚拙で極論ではあったが、「俳句とは五・七・五のリズムの文体を駆使した映像化である」と納得し作句に手応えを感じた記憶がある。今は、その考えはかなり訂正し、俳句固有の存在の有り方、に執着している。それは、田川飛旅子を通して加藤楸郎という大きな存在に触れることができたことによる。その求心的ともいえる姿が存問として今の私には見えている。

## 《略歴》

中村和弘（なかむら かずひろ）。

昭和十七年一月十五日生れ。五十四歳。

静岡県周智郡森町出身。上京後、映画の脚本、広告のコピーを学ぶ。現在広告代理店勤務。

二十代の終りごろから田川飛旅子に学び、また数年間「寒雷」句会にて加藤楸郎の薫陶を受ける。田川飛旅子主宰誌「陸」創刊より今日まで二十二年余り編集を担当。

現住所 東京都板橋区中台三の二十七

J—1006

（「現代俳句」6月号より転載）